中山間地域における「地域活性化」とは

-千葉県富津市金谷大沢集落を事例に-

In search for the meaning of “regional activation” in hilly and mountainous area: A Case Study of Osawa Community, Kanaya District, Futtsu City, Chiba Prefecture

学籍番号　47096746
氏　　名　風間正利（Kazama, Masatoshi）
指導教員　清水亮 准教授

1.　研究目的と背景

「地域活性化」とはどのようなものであるのかということを再考する時期にきている。理由としては,「誰のための活性化なのか分からない」といった問題が生じているからである。現在，社会は縮小に向かい今までとは違った価値観で未来を見据えなければならなくなっている。そこで，いわゆる地域活性化が最も必要とされ，縮小傾向が激しい中山間地域に着目し，これからの地域活性化とはどのようなものとなり得るのかを検討していきたい。

現在,中山間地域に注目が集まっている。注目というのは，地域維持の困難性を示すような危機としての注目と，地域資源の見直しの気運を高めるような好機としての注目である。そして高まる注目の中，地域を盛り上げるべく，地域活性化活動が盛んに行われるようになってきた。地域活性化活動は若者からお年寄りまで，職業も多種多様，そして，住民以外の人々が主体となるなど様々な人々が携わっている。けれども，その複雑さゆえ,「誰のための地域活性化なのか分からない」という事例も出てきている。特に，活性化という言葉は暗黙的に，経済の活性化という意味を指し示しているため，何らかの客観的指標の増減に目がいきがちになってしまう。ただ，中山間地域において，経済的に地域を盛り上げていくことは難しい。加えて，小さい地域であるため，活動の失敗の与える影響は大きく，リカバーも効きづらいのが現状である。

それゆえ，縮小化が激しい中山間地域においては，新しい価値観のもと活性化を考えていくことが急務である。加えて，縮小化は日本全体においても避けられない事態となっている。したがって，中山間地域の活性化を考えることは，ひいては日本全体にとっても有用なことである。

2.　活性化言説と内発的発展論

地域を盛り上げていくためには活性化が必要である。しかし,「誰のための活性化なのか分からない」という事態が生じている。その原因は，2 つあり，1 つは旧来の右肩上がりの経済や増加し続ける人口を前提とした活性化活動が行われ，現状とかけ離れていることである。もう 1 つは，何をもって活性化とするのかの判断が難しく，人口の増加，経済指標の向上といった客観的指標に傾注し，客観的指標の変動が住民の実生活にどのような影響を与えているのかが見えない点である。こういった背景により，本来住民が主体的に行わなければならない活性化活動であるが，現実にそぐわず，そして，住民は蚊帳の外に置かれてしまうという事態が生じている。

それでは，どのような活性化のあり方が

重要であるのかを考えたときに，内発的発展論の「住民が自律的に地域を永続させていく」という視座を，明確に活性化言説に組み込むことが大切であると考え，内発的発展論を引用した。そして，交通や情報網の発達により，都市部と地域との繋がりが容易になってきたことを勘案し，地域資源を住民主導でマネジメントしながら，地域内外を巻き込んで地域を活性化していく行為がこれからの活性化において必要な要素であると考えた。

3. 調査地・研究方法

調査地は，千葉県富津市金谷大沢集落である。調査方法としては現地住民と同地で活動を行っている学生団体 KOOGA のメンバーへのヒアリング，文献調査を主に行った。加えて，大沢集落と関係を持つ，市役所職員や他地域の住民にも大沢との関わりについてヒアリングを行った。

4. 調査地選定の理由

大沢集落では，実際に地域資源を住民主導でマネジメントし，地元住民の収益の向上，外部の知恵を活かした取り組みの開始などの新しい動きを集落内で起こし始めている。また，そこに入り込み活動を行っている KOOGA という学生団体との関わりを説明していく。そして，今まで内発性も無く，活動も行われていなかった土地に，外部の人々が入って来ることにより，それが刺激となり，活動を生じさせることが可能となった要因を分析し，これからの地域活性のあり方を検討していくことは意義のあることだと考えた。

徳野（2008）も「現在のいわゆる地域活性化の問題は建前と現実の空回りが起きていることであり，原因は成果結果の喧伝にあおられ，焦りが加速し，内発的な活動のプロセスや要素の認識が欠落していること」と指摘している。それゆえ，内発的な状況認識を得ることができやすい本調査地は活性化を再考しやすい場所であると言える。

5. 大沢集落

大沢集落とは，千葉県富津市金谷にある集落である。人口は 10 戸 33 人の中山間地域にある集落である。JR 浜金谷駅から車でおよそ 30 分の場所に位置している。移動時間はあまりかからないものの，国道から大型車両が通行できないような完全に舗装がされていない山道を 3 キロほど登った場所から集落が点在し，携帯電話の電波は圏外となるような場所である。

基幹産業は農業であり，ほとんどの家がなんらかの形で農業を営んでいる。けれども，山間地でまとまった農地がないという理由から，農業振興区域から外れ，実際に農業で生計を立てていくのはかなり厳しい状況である。制度と現状が合っていないという，現状認識が行いづらい農村ならではの弊害が出てきてしまった形である。

また，交通問題も深刻である。例えば，大沢集落から富津市役所にいくためには約 25 キロの距離を移動しなければならない。加えて，病院も集落を降りなければならない。もちろん歩いて行けるわけではなく，車が必要であり，公共の移動手段もない。現在は，親戚との相乗り，または，知り合いにお願いをする形で成り立っているが，運転者も高齢者が多く，このような相互扶助の仕組みがいつまでもつのかという危機意識を募らせている。他にも，集落で続いていた祭りがおよそ 10 年前から途絶えたりするような文化の継承問題，休耕地が増えるといった土地管理問題，私道整備問題や教育問題といった中山間地域の農村が抱えるような多くの問題を大沢集落も抱えている。また，それらの諸問題は単独に存在しているのではなく，有機的に結びつき，

負の循環を促進している。例えば，高齢者が多くなり，集落は次第に活気を失い，その姿を見た若者は地域を飛び出し，産業が廃れていった。とりわけ，地域の維持に必要な若い人材は，子どもの教育問題を悩み地域をあとにしてしまうという。

集落の声が外部に届かず，現状と制度の溝ができはじめ，なかば忘れられた集落になりつつあった大沢であるが，3 年ほど前から若者たちと定期的な交流が起き始めた。きっかけは 2007 年，住民である A 氏が集落に新しい風を吹き込みたいとの想いから，農林水産省の事業である「田舎で働き隊」の隊員を受け入れるために金谷活性化委員会を設立し，國學院大學の学生を受け入れたことに始まる。また，次年度の同事業にその学生の後輩が参加し，そのつながりを受け継いだ。そして，他地域ではあるが同じく同事業に参加していた学生たちがこの経験を活かしたいとの想いからすでに大沢集落をフィールドに活動をしていた國學院大學の学生と合流し，2009 年 KOOGA という学生団体を設立し現在に至っている。

6. KOOGA の大沢集落での活動

住民と KOOGA のメンバーとの活動とその成果をまとめるとともに，成果を上げることができた要因を探っていきたい。まず両者が行った活動は次の 6 つである。

① 夏合宿
② 古代米の栽培と加工品の作成
③ お茶会の開催
④ 市役所との繋がりの構築
⑤ 甘夏ジャムの販売
⑥ エコプロダクツ 2009 の出店

そして，6 つの活動から次の 5 つの成果をもたらした。

① 外部の知恵を住民が利用した
② 外部市場から資金を稼いだ
③ 市役所との繋がりを強化した
④ 文化の継承の一端となった
⑤ 前向きな気持ちになった

まず，1 つ目の外部の知恵を住民が利用したという成果であるが，この成果は，古代米の栽培と加工品の作成，甘夏ジャムの販売，エコプロダクツの出店から見て取れる。古代米とエコプロダクツ出店は農業高校出身のメンバーの提案に起因している。また，甘夏ジャムの販売は市役所の職員の提案でもある。

古代米の加工品については，まねする人が現れると市場価値が下がるため，次の方法を模索していきたいという発言が住民から出てきている。また，甘夏ジャムの販売，エコプロダクツにおける農作物の販売については，メンバーが直売所で売るさいに，顧客のニーズを聞いてきて欲しいと住民から要望があり，メンバーは詳細な報告書を作成し，住民に渡している。

このように，はじめは集落の外部の者の提案であるが，地域資源の発掘から販売，そして，フィードバックからネクストステップの模索という一連のプロセスに住民が主体的に関わっている様子が見て取れる。

次に重要な成果として，外部市場から資金を稼いだことが上げられる。古代米の加工品においては従来までの米の収入を大幅に超える利益を記録するに至った。

実際に，集落内で経済の仕組みを作り上げることの困難性は，縮小社会により日に日に増している。それゆえ，柔和に地域内外のリソースを活用し，外部市場からも資金を呼び込む仕組みを作り上げていくことが現実的に，集落を残していくことに繋がるのである。それゆえ，住民が主体性を持ち，KOOGA を良い意味で利用しながら，外部市場で資金を稼いだことは特筆すべき事実である。

次の成果として，市役所との繋がりを構築したことがあげられる。若者が集落に入

り込んで活動をしていることに関心を持った市役所職員が集落を訪れるようになった。そして，甘夏ジャム作りの提案に始まり，産業まつりへの招待など，職員との関係から活動の幅が広がっていった。

市町村合併のあおりで市役所までの距離は遠く，高齢者の多い集落では，市役所まで行くことが困難でもあった。それゆえ，物理的な距離はもちろん，心理的にも市役所との距離は遠いものとなっていた。けれども，メンバーとの活動の中で市役所の人が集落に来るようになり，そして，広報などで活動を取り上げられることにより，住民の意識は変わっていった。

4 つ目の成果は文化の継承の一端となったことである。例えば，古代米の加工を行うさいに住民を講師として招いたり，お茶会や夏合宿においては，集落の文化や歴史について住民が熱く語る場面も見られた。

そして，一番大きい成果は，前向きになったという集落の変化である。実際に，古代米の加工に関しては，次の手段を考え始めたり，集落内での活動を市の回覧板で告知できないかと提案が出てきたりと集落内の活動が能動的に動き出してきた。

7. 交流の成功要因分析

住民と KOOGA の活動が上手くいった要因は,「メンバーが定期的に集落を訪れていた」,「ムラのこしを掲げ互いに考えるスタンスを取った」ことであった。

定期的に集落を訪れることで,当初は「集落に新しい風を吹き込んでいきたい」,「よく分からない若者が来たが，あまり関心がない」といった集落に形成されていた 2 つの言い分を,「KOOGA と上手く集落を盛り上げていきたい」という 1 つの言い分にまとめ上げたのである。

また，言い分をまとめ上げるために必要であったこととして，誇りの再建があげられる。KOOGA が集落に入った当初はムラおこしを掲げ，それが上から目線と受け取られ,一度住民と衝突をしている。そして，集落で活動をする中で,集落に誇りを持ち，あえて集落に残った人々の存在を是認し，ムラのこしという住民目線での活動にシフトしていった。それは言い換えると，誇りを尊重した誇りの再建と言い換えることができる。こうして，住民との距離を縮めていった。その中で，KOOGA に対してより信頼感を増してきた好意的な層の住民が，活動に無関心な層を活動に引き入れていった。KOOGA からの直接の誘いにはなかなか関心を見せなかった住民も，同じ集落の人々の誘いならと活動に参加することが増えていったのである。

8. まとめ

住民主導で活動を行っていくためには，異なった言い分を融合していくことが活性化活動に必要なことである。とくに，中山間地域においては，失敗が致命傷になることがあるため，その必要性が高い。

しかし，活性化活動は現状を変えていくための活動でもあるため，今までの活動が駄目だからどうにかしなければならないという否定の気持ちが入り混じり，住民と温度差が出てきてしまうこともある。特に，人数の少ない地域で行う場合は住民総意での活動が絶対条件となるため，気を付けなければならない。それゆえ，地域に住んでいる人々の誇りを認識し，地域資源を住民主導でマネジメントしながら，地域内外を巻き込んでいくことが中山間地域における活性化において必要なのである。

参考文献

徳野貞雄,「農山村振興と都市農村交流活動の類型化」, 2008,『熊本大学文学部論叢』, p68